

オルケストラ シンフォニカ 東京

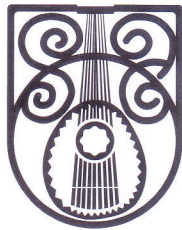
第 57 回

定期演奏会

武井守成楽団創設100年記念演奏会

平成 28 年 4 月 10 日 (日) 午後 2:00 開演

第一生命ホール



OSTの歴史

一般社団法人 日本マンドリン連盟副会長 工藤哲郎

OSTは我が国の社会人マンドリン団体の中で最古のオーケストラである。創設者武井守成（男爵 1890 年～ 1949 年）は、大正 4（1915）年 10 月に田中常彦（慶応義塾大学マンドリンクラブ創設者 1890 年～ 1975 年）の指導のもとに合奏練習を開始、翌大正 5 年 1 月、シンフォニア マンドリニ オルケストラ（SMO）と命名、標章を定め、メンバーの徽章をつくり、同年 6 月 4 日、第 1 回試演会を武井邸にて開催した。

関東大震災後の大正 12（1923）年 11 月、オルケストラ シンフォニカ タケキ（OST）と改称、以後、昭和 4（1929）年 11 月 6 日の復興第 1 回演奏会（通算 49 回）まで、武井守成主宰のもとに演奏会を継続する。昭和 31（1956）年 7 月にはオルケストラ シンフォニカ タケイ（OST）と改称、武井没後 10 年の昭和 34（1959）年 12 月、杉田村雄（1903 年～ 1986 年）主宰のOSTに改組。杉田没後の昭和 62（1987）年 5 月、オルケストラ シンフォニカ 東京（OST）と改称、昭和 63（1988）年 4 月 11 日に団名改称後第 1 回（杉田主宰後通算第 29 回）の演奏会を開催した。

現在は代表幹事の平田陽一、指揮の山本雅三、嶋直樹、石井啓之のもと旧来からの古き良き伝統を守りつつ活動を継続している。OSTの活躍はめざましく、我が国初期のマンドリン界はOSTを中心として発展したと言っても過言ではない。ここで、OSTとその主宰者武井守成の主な功績を以下にご紹介しよう。

1. 演奏活動では海外の新曲を紹介し斯界をリードするほか、ラジオ放送への出演、レコードのリリースなども行う。
2. 収集した楽譜を「武井音楽文庫」として設置し、マンドリン・ギター研究誌を通して紹介し公開する。ギター楽譜約 2,000 曲、マンドリン楽譜約 3,500 曲が含まれ、現在、国立音楽大学図書館に保管されている。
3. 1916 年、機関誌「マンドリンとギター」を創刊（1924 年「マンドリン ギター研究」と改称）し、楽譜・作曲者の紹介、国内外の斯界紹介、楽譜の添付などを行い、斯界を啓蒙する。
4. マンドリン合奏コンコルソ、独奏曲コンコルソ、マンドリン・オーケストラ曲コンコルソを開催し、斯界の発展に貢献する。
5. 「マンドリン・ギター及其オーケストラ」、「マンドリン・ギター片影」を著す。
6. 武井守成の作品発表（114 曲プラスアルファ）。その作品は「武井守成作品集」（全音楽譜 1958 年 & 1960 年）として出版、自筆譜も現存しており、国立音楽大学付属図書館に所蔵されている。

武井守成氏没後からOST復興までのタケイ音楽の演奏活動

オルケストラ シンフォニカ 東京 元代表幹事 石黒不二夫

昭和 24 (1949) 年の武井守成氏没後、昭和 28 (1953) 年までは演奏会を毎年開催していましたが、昭和 29 (1954) 年は継続することができませんでした。しかし、コンサートマスターを務めていた甲藤三千雄氏と杉田村雄氏を中心となって、タケイ音楽の演奏活動を続けました。前OSTメンバーに川崎貞利氏や山本弘氏（現OST指揮者山本雅三氏の父上）等が加わり、昭和 30 (1955) 年に杉並マンドリンクラブを結成しました。当時早稲田の学生であった私は川崎氏の紹介でギターローネのパートで参加しました。

昭和 34 (1959) 年、杉並マンドリンクラブの旧タケイのメンバーが主体となってOSTを復興し、米軍から返還後の日比谷の第一生命ホールを定期演奏会場としました（その後改装となり、現在の晴海・トリトンスクエアに移転）。そのOST第1回（通算60回）演奏会は、指揮者をガエタノ・コメリ氏（イタリア人、元藤原歌劇団指揮者）と小林恵吾氏、コンサートマスターを杉田氏が務め、OSTの旧メンバーの高田三九三氏（童謡作家）等が演奏に参加しました。爾来、OSTは今回の演奏会まで武井音楽の演奏を続け、将来へと繋げています。

（付記）復興後間もなく、下記の音源を制作してマンドリン音楽の普及に貢献しています。

1. 1960 年 コロンビア LP 盤「ギター・マンドリンによる日本の旋律」
2. 1964 年 コロンビア LP 盤「マンドリンオーケストラによる日本の郷愁」

ご挨拶～武井守成楽団創設100年を迎えて～

オルケストラ シンフォニカ 東京 代表幹事 平田陽一

本日も多数のご来場ありがとうございます。

武井守成氏が大正 5 (1916) 年にシンフォニア マンドリニ オルケストラの演奏会を行ってから 100 年の時が過ぎました。大正 12 (1923) 年にオルケストラ シンフォニカ タケキと改称、永きにわたり演奏会を継続され、オルケストラ シンフォニカ タケキは私の命であると、楽団に対しての強い思いを語っておられます。

武井守成氏が日本マンドリン界の創生期に深く関わられ、多くのマンドリン愛好家、並びにギター界に強固な礎を作られたことに深い感銘を受け、大勢の仲間に支えられながら、力強くリーダーシップを維持されましたことに深く敬意を表します。

大正 5 年の創設以来、何度かの改称の後に、現在のオルケストラ シンフォニカ 東京の呼称になり、この呼称での第 60 回定期演奏会も近くなりました。その折には多くの武井作品を演奏したいと思っています。

私たちの楽団所有楽器には、すばらしいものが多数あります。ライオンの彫刻がほどこされているマンドローネや、高名なカラーチェが来日した記念として大正天皇に献上されたと伝えられている（真偽は不明ですが）リュートモデルノなどです。それらは本日も使用されています。武井氏もきっと喜んで聞いてくださっていると感じております。

これからも、会員一同、日々研鑽し皆様と共にマンドリン音楽を楽しんでいきたいと思ひます。武井守成氏の情熱を心に刻みながら。

プログラム

第一部

指揮： 嶋 直 樹

1. 「テ・デウム」より前奏曲 M. A. シャルパンティエ (嶋 直樹編)
2. 夜の歌 E. エルガー (嶋 直樹編)
3. 悲しきワルツ J. シベリウス
4. 新ピチカートポルカ J. シュトラウスⅡ世 (嶋 直樹編)
5. ポルカ「狩りにて」 J. シュトラウスⅡ世 (嶋 直樹編)

第二部

指揮： 石 井 啓 之

1. 春の陽 石井啓之
2. 春のノスタルジア 武井守成
3. 春さりゆく 武井守成
4. 野にて 平山英三郎
5. さくら奇想曲 藤掛廣幸

《 休 憩 20分 》

第三部

指揮： 山 本 雅 三

1. ギター協奏曲 二長調 A. ヴィヴァルディ
(ギターとマンドリン合奏の為にS. ベーレント編)
ギター 小林 透
第1楽章 アレグロ 第2楽章 アンダンテ・ラルゴ 第3楽章 アレグロ
2. 序曲ニ短調 S. ファルボ・ジャングレコ
3. ギリシャ狂詩曲 N. ラウダス

曲 目 解 説

第 一 部

「テ・デウム」より前奏曲

M. A. シャルパンティエ

マルク = アントワース・シャルパンティエ (1643 年～ 1704 年) はフランス盛期バロック音楽を代表する作曲家で宗教曲や舞台音楽を数多く作っています。テ・デウムの前奏曲は毎年正月に開催されるウィーンフィルハーモニー・ニューイヤーコンサートのオープニングテーマ曲など様々なところで聴くことが出来るのですが、曲名は知られてはいないようです。タイトルの「テ・デウム」は「Te あなた Deum 主を」という意味で、歌詞の冒頭の部分を取って曲全体のタイトルとしています。歌詞は Te Deum laudamusu と続き、「神であるあなたを私たちは讃えます」ということになります。前奏曲は独唱に入る前に器楽だけで高らかに華々しく演奏されます。

夜の歌

E. エルガー

エドワード・エルガー (1857 年～ 1934 年) はイギリスの作曲家で行進曲「威風堂々」、「愛の挨拶」など多くの曲を作っています。この曲は元々ヴァイオリンとピアノのために書かれたもので、昨年私たち O S T で演奏した「朝の歌」と対をなしています。原曲のハープパートはピアノによって演奏されます。

悲しきワルツ

J. シベリウス

ジャン・シベリウス (1865 年～ 1957 年) はフィンランド出身の作曲家で交響曲・劇音楽・管弦楽曲・様々な器楽曲など多岐にわたった作品で知られています。「悲しきワルツ」はシベリウスの義兄アルヴィド・ヤルネフェルトの戯曲「クオレマ (死)」の上演のために付随音楽として作曲された 6 曲の中の一つです。主人公の少年の母親が眠っていると踊り子たちの夢を見る。その踊り子とともに母親も踊りやがて疲れた頃死神がやってくる、という暗いストーリーとなっています。それぞれの曲はその後作曲者の手により単独の作品として編曲され演奏されています。

新ピチカートポルカ ポルカ「狩りにて」

J. シュトラウスⅡ世

ウィーンのワルツ王として知られているヨハン・シュトラウスⅡ世 (1825 年～ 1899 年) の作品を 6 年ぶりに取り上げます。今回はポルカを 2 曲。

新ピチカートポルカは兄弟合作で有名な「ピチカートポルカ」の作曲から約 20 年後にヨハンⅡ世一人で作曲したもので中間部のトリオの部分には鉄琴が加わり、より魅力的な雰囲気を出しています。

ポルカ「狩りにて」は、シュトラウスⅡ世自作のオペレッタ「ウィーンのカリオストロ」の中の「おお、私の駿馬よ」の中のメロディーを元に作曲されたポルカで、狩りのラッパの音や鉄砲の音なども聞こえてくる楽しい曲です。

(文責 嶋)

第二部

春の陽

石井啓之

第二部は、春にまつわる曲を集めてみました。

指揮者の石井啓之が、MIDI というコンピュータ音楽が流行していた 1990 年代に作った習作です。作者の生まれ育った奈良盆地の暖かい春の陽ざしをイメージしています。前奏のあと、マンドラの和風な主旋律と呼応するマンドロンチェロのオブリガートに始まり、その変奏としてマンドリンが加わっていきます。中間部で春の嵐が吹き、そのあと、ゆったりしたトリオにつながっていきます。

春のノスタルジア

武井守成

作者の武井守成が、大正 15 (1926) 年に父を亡くし続いて大正天皇の崩御に遭遇し多忙を極め、体調を崩し湯ヶ原に静養したときに作曲しました。『静養の中で心の落ち着きを取り戻したときに、懐郷的思いに胸を打たれた。当時の私の気持ちを今も尚まざまざと思い出させてくれる忘れがたき曲である。』と作曲者自身の解説において述べられています。菅原明朗氏に贈られた曲で、昭和 2 (1927) 年に作曲及び初演がなされている。

春さりゆく

武井守成

昭和 15 (1940) 年に作曲され、昭和 16 (1941) 年に作曲者自身の指揮により初演されました。この曲について以下のように作者のことばが残されています。『春が過ぎてゆく、静かに音もなく過ぎてゆく、あとには華やかな夏が迫りよっているにしてもやはりそれは淋しい。春が過ぎゆく、静かに音もなく……。』

野にて

平山英三郎

作者の平山英三郎は、タケイ時代から長きにわたり O S T に在籍し、数多くの作曲・編曲を残し、またマンドリン教則本を執筆し、斯界の発展に寄与しました。現在の日本マンドリン連盟につながるマンドリン弾きの懇話会であるマンドリンの群れを作ったことでも知られています。本曲は、作者が昭和 10 (1935) 年に早稲田大学を卒業して帰郷しているときに病を得て入院中に作曲されました。作者は著書で以下のように述べています。『失意の春に病床から野を想う心は、ただひたすらに明るく明るくと志向していて「野にて」は私の作品の中でも極端に明るい曲になった。』

さくら奇想曲

藤掛廣幸

誰でも知っている日本古謡「さくら」のメロディを、変奏曲の技術をかなり自由に使いながら新しい作品として作曲しました。リズムックな動きから、激しく力強くなったり、美しく優美な曲想になったり、音楽は様々な形に変化していきますが具体的な状況を描写しようとしたものではありません。音楽のメロディ、リズム、ハーモニーという要素を如何に変化に富んだ組み合わせで面白くするか、という事に留意しました。長い悠久の歴史を感じる人もいれば、満開に咲き誇る一面の桜をイメージする人もいるかもしれないし、ハラハラと舞い散る桜吹雪を思い描く人もあるかもしれません。演奏する人、聞く人、それぞれ自由な連想をふくらませてお楽しみ頂ければ嬉しく思います。(作曲者の解説)

(文責 石井)

第三部

ギター協奏曲 二長調

A. ヴィヴァルディ
(ギターとマンドリン合奏の為に S. ベーレント編曲)

ギター 小林 透

第1楽章 アレグロ 第2楽章 アンダンテ・ラルゴ 第3楽章 アレグロ

アントニオ・ヴィヴァルディ(1675年～1743年)は急緩急の三楽章形式で弦楽器、管楽器の協奏曲を数多く作曲しており、その中にマンドリンの為に二長調、2つのマンドリンの為にト長調、古典リュートの為に二長調とハ長調があります。その二長調のリュート協奏曲をギターに代えて、ジークフリート・ベーレントがマンドリン合奏協演に編曲したものです。

今回のソリストはO S T正会員で幾つかのギターコンクールで入賞した新鋭のギタリスト小林透です。

序曲二短調 ギリシャ狂詩曲

S. ファルボ・ジャングレコ
N. ラウダス

この2曲は、共に1912年イル・プレットロ誌主催第4回作曲コンクールで1位2位に入選しています。O S Tの始祖である武井守成氏が昭和2(1927)年9月号の「マンドリン研究」誌に「ファルボの死」と題する追悼文を寄稿しています。

『四月八日、その故郷シチリア島で、短い患いの後にあの世に旅立った。ラウダス、ボッタキアリ、ミラネージ、アマデイ、マネンテ。マンドリン曲の作曲として知られている人達を顧みる時に、彼ファルボが如何に大なる光明を放っていたかが今更に思い起こされる。ラウダスと彼とはマンドリンオーケストラ曲作家として現代の双璧である……。ああ、彼は死んだ。』

昭和8(1933)年の旧O S T第34回演奏会において2曲同時に演奏されています。武井氏の当時の曲目紹介を抜粋します。

『1911年1月イルプレットロ主催第3回作曲コンコルソで、ファルボの「田園写景」が当選したことはマンドリンアンサンブルに一つのエポックを作ったものであった。従来曲のもつロマンティシズムはファルボによって全く形を新たにされたと言えるからである。此形こそ従来マンドリンアンサンブルにおいて不可能とされていたものである。そして翌1912年6月に第四回コンコルソでまたもファルボの「二短調序楽」が当選するにおよび彼の地位は不動なものとなった。……』

『ラウダスは希臘(ギリシャ)の作曲家。マンドリンギターの学校「マンドリナータ・アテニューゼ」の校長であり、その合奏団の指揮者として1912年、米国に演奏旅行を試みた結果、米国の斯樂を急激に発達せしめたといわれる。希臘狂詩曲のコンコルソ二等の当選については二つの想像が成り立つと思う。其一は同コンコルソの編曲の部において彼が一等に当選したため政策上二等としたものであり、其二は提出の際「希臘風主題に拠れる序楽」とした事が内容から見て妥当でないと考えられることである。兎に角此曲は一等当選の「二短調序楽」「劇的序楽(カペレティ)」よりも遙かに大なる歓迎をうけた。勿論一面に於いてファルボ、カペレティが当時の一般から理解され難かった事も否定できないが、然しラウダスのもつ美と力とは明らかに立証される。(中略)彼は序楽詩「エカーヴの嘆き」を公にした。けれども希臘主題の特異性とポリフォニーの力強さは依然として此曲を最高名として居る。』

100年以上に渡りマンドリンオリジナル曲の傑作として愛奏され続けているその魅力を改めて探ってみたいと思います。

*ニコラス・ラウダス自筆譜には第一と第二の「ギリシャ狂詩曲」があり、今回の曲は第二となります。

(文責 山本)

出 演 者

指 揮 者：山 本 雅 三 嶋 直 樹 石 井 啓 之
 コンサートマスター：田 中 尊 子 小松崎美奈子

第一マンドリン：田 中 尊 子 小松崎美奈子 第二マンドリン：富 田 容 子 高 嶋 明 美 マンドラテノール：滝 田 ふ さ 子 阿 形 佳 美 ギ タ ー：小 林 透 高 嶋 典 子 原 島 美 歩 リュートモデルノ：嶋 直 樹 マンドロンチェロ：田 村 美 恵 子 マンドローネ：小 川 眞 寿 美 コントラバス：佐 藤 正 フ ル ー ト：★松 尾 圭 子 クラリネット：★福 嶋 美 香 ピ ア ノ：★浦 畠 晶 子 打 楽 器：★田 中 恵 利 加 ★藤 本 絢 香	田 島 明 子 大 口 千 秋 木 村 栄 子 後 藤 俊 明 新 谷 文 子 田 中 俊 文 子 平 田 陽 一 戸 次 脩 澤 田 行 雄 石 井 啓 之 須 賀 勇 介 吉 尾 浩 石 黒 不 二 夫 高 梨 一 弘	金 勝 溪 子 神 敏 子 渡 辺 か お る 中 村 順 子 渡 辺 清 佐々木興治 荏 本 妙 子 門 田 雄 二 船 崎 薫 五 十 嵐 豊 樺 澤 と も 子	本 間 輝 樹 新 美 恵 子 岩 崎 宏 子 ★宮 崎 俊 行 深 野 靖 夫 伊 藤 安 子 関 谷 裕 子 木 下 亜 紀 子 瀧 澤 拓 磨 山 本 雅 三 ★清 水 威 志
--	--	---	---

(★=賛助奏者)

幹 事：平 田 陽 一(代表) 山 本 雅 三 嶋 直 樹 船 崎 薫
 小松崎美奈子 阿 形 佳 美 石 井 啓 之 高 嶋 典 子
 吉 尾 浩
 会 計 監 事：本 間 輝 樹

《第58回定期演奏会のお知らせ》

◎日時:平成**29**年**4**月**9**日(日)午後 2:00 開演 ◎会場:第一生命ホール(晴海・トリトンスクエア)

オルケストラ シンフォニカ 東京 (O S T)

連絡先：〒215-0017 川崎市麻生区王禅寺西5-21-1 平 田 陽 一

T E L : 044-989-1987 E-MAIL : chokoku@jcom.home.ne.jp

ホームページ : <http://ostokyo.info/>